

# 第3回科学技術外交シンポジウム

～変革の時代における科学技術外交を考える～

日時：2024年3月21日(木) 14:00～18:00 (13:20 受付開始)

会場：科学技術振興機構 (JST) 東京本部別館ホール

会場へのアクセス <https://www.jst.go.jp/koutsu.html#BEKKAN>

入場：13時20分より受付開始

形式：対面開催（一般公開）／日英同時通訳付／参加費無料（要事前登録）

主催：外務省、国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST)

後援：内閣府、文部科学省

## 参加登録（定員100名、先着順）

こちらからお申し込みください。 <https://form2.jst.go.jp/s/JST-CRDS20240321>

登録締切：2024年3月18日（月）正午 ※ただし定員（100名）に達し次第締め切り

## 開催趣旨

気候変動やパンデミック等の地球規模課題の深刻化、ロシアのウクライナ侵略といった地政学的緊張の高まり、重要・新興技術の急速な発展と社会へのインパクトの拡大など、科学技術イノベーション(STI)をとりまく世界情勢は急速に変化しています。従来から経済・産業の進展や地球規模課題の解決にSTIの役割は必要不可欠であることは認識されてきましたが、昨今はそれらに加えて安全保障や外交、保健衛生、エネルギー、食料といったあらゆる重要な政策や戦略とSTIの結びつきが強くなっています。同時に、科学と政策と社会の連携やインターフェースがこれまで以上に重要になっています。また、重要・新興技術の育成・保護のための戦略的な国際連携が求められ、国境を越えて人材獲得を目指す動きもあります。そして、こうした状況に対応するため、STI政策の革新が強く求められています。一方、地球規模課題解決には全世界との協力が必須です。2015年9月の国連サミットで、2030年までの国際目標として「持続可能な開発目標 (SDGs)」が採択されてから8年あまりが経過し、折り返し地点を過ぎました。しかし、COVID-19 パンデミックやロシアのウクライナ侵略などの影響もあり、SDGsの達成に向けた進捗が遅れが生じており、これまでも推進してきたSTIを活用した取組 (STI for SDGs) を一層強化することが求められています。

このような変化の中で、科学技術外交はこれまで以上に重要となるとともに、期待される役割にも変化が生じているのではないのでしょうか。「科学技術外交」という概念は、2010年頃、英国王立協会と米国科学振興協会 (AAAS) が、3分類 (science in diplomacy、diplomacy for science、science for diplomacy) を提唱するなどして整理され、様々な取り組みが推進されてきました。しかし、世界情勢の変化に伴い、今後10年を見据えた科学技術外交の概念を再考し、その価値やシステムを再定義する必要があります。

例えば、政府職員と民間有識者双方が参画するトラック 1.5 外交の積極的な推進や、科学技術外交の重要なツールである国際共同研究プログラムの戦略的拡充など、様々なレイヤーでの重層的な取組が必要となるでしょう。また、2023 年 9 月の G20 ニューデリー・サミットでは、G20 首席科学顧問ラウンドテーブル（8 月開催）の成果文書が附属文書として採択されました。こうした中、2025 年に向けて、科学技術外交の国際的な議論ネットワークが急速に拡大しています。本シンポジウムでは、変革の時代に、科学技術外交はどうあるべきか、国内外から科学技術外交キーパーソンが東京に集い議論を深めます。その結果は、国際的な議論にも大きく貢献することが期待されます。

### 科学技術外交の国際的議論ネットワークの急拡大

<b>2023</b>	<b>10月：STSフォーラム（京都）</b> ・岸田総理が開会挨拶で「サイエンス・ディプロマシーが不可欠である」と言及 ・科学顧問ラウンドテーブルを開催	
	<b>12月18日・19日：第1回欧州科学外交会議（スペイン・マドリード）</b>	
	<b>1月31日：Science &amp; Diplomacy誌社説“Science Diplomacy- 15 Years On” 発表（注）</b>	
	<b>2月15日-17日：AAAS年次総会（米国・デンバー）</b>	
	<b>3月21日：第3回科学技術外交シンポジウム（東京）外務省・JST主催</b>	
	<b>4月23日-25日：OECD・CSTP閣僚級会合・日ASEAN科技ハイレベルラウンドテーブル（サイドイベント）</b>	
	<b>4月30日-5月2日：INGSA会議・FMSTAN会合（ルワンダ・キガリ）</b>	
	<b>5月9日-10日：第9回国連STI for SDGs フォーラム（米国・NY）</b>	
	<b>5月29日-30日：GRC年次総会（スイス・インターラーケン）</b>	
	<b>6月12日-15日：ESOF（ポーランド・カトヴィツェ）</b>	
<b>2024</b>	<b>8月：ASEAN若手・中堅研究者のための科学外交ワークショップ（AAAS、TWAS、TSRI共催、@タイ）</b>	
	<b>10月6-8日：STSフォーラム（京都）</b>	
	<b>10月：GESDA（ジュネーブ科学外交先見財団）年次総会（スイス・ジュネーブ）</b>	
	<b>11月20-23日：World Science Forum 2024（ハンガリー・ブダペスト）</b>	
	<関連事項> 5月 OECD閣僚理事会（議長国：日本） 5月 G7サミット（議長国：イタリア） 11月 G20サミット（議長国：ブラジル）	
	（注）2025年は、AAASと英王立協会が科学技術外交の3要素を提言してから15周年。 → 今回もAAASと英王立協会が主導して、 <u>新時代の科学技術外交の価値・方法等の検討の動き</u> S&D誌の特集号の企画、関係セクターへの参加呼びかけ（2024年3月31日〆切）	
<b>2025</b>		

## プログラム

### 14:00-14:20 開会セッション

主催者挨拶 深澤陽一 外務大臣政務官（予定）

#### 来賓挨拶

松尾泰樹 内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局長（予定）

柿田恭良 文科省 科学技術・学術政策局長（予定）

岸輝雄 東京大学名誉教授・前外務大臣科学技術顧問

### 14:20-16:20 セッションⅠ：科学技術外交の注目動向

#### 14:20-14:40 基調講演

橋本和仁 科学技術振興機構理事長・内閣官房科学技術顧問

#### 14:40-15:05 米国の動向

パトリシア・グルーバー米国国務長官科学技術顧問

#### 15:05-15:30 ASEAN 諸国の動向

オラカノケ・ファンラクサ タイ科学研究イノベーション推進委員会事務局

国際担当シニアアドバイザー

#### <15:30-15:45 休憩>

#### 15:45-16:05 欧州の動向

マルコ・ミュラー欧州研究総局コーディネーター（オンライン）

#### 16:05-16:20 有識者からのコメント

ジャン＝エリック・パケ 駐日欧州連合（EU）特命全権大使

オン・エンチュアン 駐日シンガポール大使

エミール・レヴェンドグル 駐日英国大使館公使

### 16:20-17:50 セッションⅡ：これからの科学技術外交

#### 16:20-16:40 基調講演

松本洋一郎 外務大臣科学技術顧問

#### 16:40-17:50 パネルディスカッション

モデレーター：有本建男 科学技術振興機構 参与

#### パネリスト：

染谷隆夫 東京大学 工学系研究科電気系工学専攻 教授

パトリシア・グルーバー米国国務長官科学技術顧問

オラカノケ・ファンラクサ タイ科学研究イノベーション推進委員会事務局

国際担当シニアアドバイザー

小林治 科学技術振興機構 国際部長

#### コメンテーター：

小安重夫 文部科学大臣科学技術顧問

小谷元子 外務大臣次席科学技術顧問

大土井智 文部科学省 科学技術・学術政策局 参事官（国際戦略担当）

### 17:50-18:00 総括

川合眞紀（自然科学研究機構機構長）

総司会：浅野佳那（JST 研究開発センターフェロー兼国際科学技術動向調査室調査役）

## 登壇者プロフィール（登壇順）

### 橋本和仁

#### 科学技術振興機構理事長・内閣官房科学技術顧問



2022年4月より国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）理事長（現職）、2022年9月より内閣官房科学技術顧問（現職）。

1978年に東京大学理学部化学科卒業、1980年に同大学大学院理学系研究科化学専攻修士課程、1985年に博士課程を修了。

専門分野は物理化学と材料科学。1997年から2016年まで東京大学教授（応用化学）、2016年から2022年まで物質・材料研究機構（NIMS）理事長を歴任。

2013年から2022年まで総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）の議員として科学技術政策にも積極的に関与。科学分野への貢献により、内閣総理大臣賞（2004年）、恩賜発明賞（2006年）、日本化学会賞（2012年）ハインツ・ゲリッシャー賞（電気化学会）（2017年）、紫綬褒章（2019年）など数々の賞を受賞。

### パトリア・グルーバー 米国国務長官科学技術顧問



米国務長官科学技術顧問。学术界や民間企業の研究コミュニティと連携し、外交政策優先事項の伝達を通じ、国際的な科学技術協力を推進。同顧問就任前は、海軍研究局（ONR）の研究部長として、海軍省の基礎研究ポートフォリオを担当し、将来の能力への重要な投資と高リスクな新技術研究のバランスを管理。海軍科学技術戦略計画の策定を主導し、自律性の基礎科学プログラムを開始するなど、ONRの教育、アウトリーチ、多様性プログラム

を調整。直近では、ONR グローバルのテクニカル・ディレクターとして50人の科学者とエンジニアのグループを率い、国際的な研究協力を促進し、運用艦隊／部隊の技術リエゾンとして活躍。また、海軍の国際科学プログラムを監督し、幅広い技術や相手国に年間200件以上の助成金を授与した。ONR入局前は、バテル社の海事システム担当副社長／ゼネラルマネージャー、ペンシルベニア州立大学応用研究所副所長を歴任したほか、AT&T、ルーセント・テクノロジーズ、マルコーニ・コミュニケーションズで技術管理および事業開発の要職を歴任。マイアミ大学で応用海洋物理学の修士号と博士号を、ペンシルベニア州立大学で気象学の学士号を取得。海軍研究所及びベル研究所では海洋科学の研究に従事。

### オラカノケ・ファンラクサ タイ科学研究イノベーション事務局 国際部長



タイ国立科学技術開発庁（NSTDA）の知的財産法分野の政策専門家。現在は、タイ科学研究イノベーション事務局（TSRI）に勤務し国際業務部門を率いる。

タイの学術・研究機関において、技術ライセンスオフィスや知的財産専門家を促進・強化するための政策枠組みを形成する上で、重要な役割を果たしている。2019年には、米国商工会議所グローバル・イノベーション・ポリシー・センターからグローバルIPチャンピオン賞を初めて受賞した。同賞は、知的財産の分野で、それぞれの地域社会と世界に前向きな変化をもたらすための努力を率先して行っている5人に贈られる。

2023年には、ASEANの大学・研究機関のための知的財産政策モデルを開発するため、WIPOの地域知的財産政策専門家へ選出。グローバル・ヤング・アカデミー2015/2016の共同議長を務めた後、ASEAN若手科学者ネットワークの共同設立者となる。2022年には国際学会会議（ISC）フェローに任命。2020年から2022年まで、高等教育科学研究イノベーション省（MHESI）に勤務し、政策立案を経験。

マルコ・ミュラー

欧州委員会 研究・イノベーション総局 科学外交・多国間関係コーディネーター



欧州対外行動庁（EEAS）研究・イノベーション総局の科学外交・多国間関係担当コーディネーターとして科学外交のための欧州の枠組み作りを主導。

マールブルク大学（ドイツ）で地理学の博士号を取得後、ライプチヒのヘルムホルツ環境研究センター（ドイツ）、イスプラの旧欧州委員会共同研究センター（JRC）環境・持続可能性研究所（イタリア）、ウォーリングフォードの生態学・水文学センター（英国）などで

管理職を歴任。JRC 事務局長補佐（2009～2012年）を経て、欧州委員会委員長首席科学顧問室（2012～2015年）を統括し、欧州委員会の現在の科学的助言メカニズムの立ち上げに貢献。

2017～2020年、ウィーン（オーストリア）にある国際応用システム分析研究所（IIASA）で、事務局長兼最高運営責任者代理として勤務。2020-2022年、欧州対外行動庁（EEAS）の初代科学技術顧問を務めた後、現職。

松本洋一郎

外務大臣科学技術顧問



1972年東京大学工学部機械工学科卒業、1974年同大学大学院修士課程、1977年同博士課程修了。工学博士。1977年東京大学講師、1978年助教授、1992年教授に就任。2006年から2008年まで工学部長、2009年から2015年まで理事・副学長。また、2012年から2013年まで内閣官房医療イノベーション推進室長、2015年から2018年まで理化学研究所理事、2015年から2020年まで国立がん研究センター理事、2018年から2021年まで東京理科大学長を歴任。現在、東京大学名誉教授、2020年4月より外務大臣科学技術顧問。

日本可視化情報学会、日本機械学会、日本混相流学会、日本流体力学会の名誉会員、ASME 終身会員。日本流体力学会、日本機械学会、日本工学会、ASME のフェロー、日本工学アカデミー会員。日本学術会議会員（22期、23期）。専門は計算工学、流体工学、生体医工学。